



と しょ か ん こ う し ん と 書 館 通 信



発行 ● 豊島区立中央図書館

東京都豊島区東池袋四一五一一

ライズアリーナビル四階・五階 〒170-8442

電話 ● 03-3983-7861

FAX ● 03-3983-9904

ホームページ ● <http://www.library.toshima.tokyo.jp/>

発行日 ● 平成29年1月



トピックス

- 巻頭言 弁護士・豊島区子どもの権利擁護委員 山下敏雅 …… 1ページ
- 古い本、新しい話 尾崎真理子 …… 1ページ
- 伊藤榮洪先生と豊島区立図書館 水谷千尋・近藤大博 …… 2ページ
- 生涯の一冊 大林結花 …… 2ページ
- 豊島区とミステリー 文芸評論家 樫田 萬治 …… 3ページ
- 図書館と私 日原未知子・知佳 …… 3ページ
- 図書館イベント情報・図書館開館情報 …… 4ページ

弁護士 山下 敏雅 としまさ

私は弁護士として、子どもの事件、特に児童虐待のケースに、多く取り組んでいます。

弁護士になろうと思ったのは、小学生の時でした。担任との関係がよくなかった私は、毎週、地元の図書館に通っていました。そしてある日、その図書館で10代の人が書いた1冊を手に取りました。当時問題となっていた、過剰な管理教育についての本でした。その本を通して、子どものために動く弁護士という存在を知り、人権の概念に接して心が震え、おかしなものにおかしいと声を上げることの大切さを学びました。大人になっても子どもを味方ではない「そっく強」で、

「子どもの大切な居場所としての図書館」

その後、図書館は、私の大切な居場所でした。高校の敷地の中には、時が止まったような古い図書館があり、そこでゆっくり過ごすことが好きでした。司法試験の受験生時代は、大学の総合図書館で過ごす毎日でした。

弁護士となった今、子ども向けの法律ブログを毎月書くにあたって、基本的知識の再確認と最新情報の入手のために、弁護士会の図書館を訪れています。

児童虐待や少年非行、いじめによる不登校など、さまざまなケースで子どもたちと出会います。いずれのケースも、居場所がなく、一人追い詰められていたことがほとんどです。ここにいていいんだと実感できる

新航路【41】

新年 明けましておめでとうございます

明けましておめでとうございます。今年7月には、中央図書館が現在地に移転開設して満10年になります。そこで周年にこだわって今年100年目にあたるひと・ものを挙げてみます。

豊島区に縁の文化人2名が生誕100年になります。大正6年(1917年)に、ひとりとは高山良策氏(～1982年)(画家・すずめが丘のアトリエ村に入居、円谷プロ製作の特撮番組の怪獣の製作や映画「大魔神」の造形をした)が山梨で生まれ、もうひとりとは長沢節氏(～1999年)(ファッションイラスト教室として有名な「セツ・モードセミナー」を主宰)で会津若松市に生まれ、それぞれ池袋モンパルナス地域に居住してい

ました。当館の連続講座・地域研究セミナーのテーマでもある「池袋モンパルナス」は、大変に多くの芸術家が住んでいた日本でも稀にみる文化人のコミュニティであったと実感します。まだ多くの視点から研究できるテーマとして期待が膨らみます。

また、ソメイヨシノ桜発祥の地を発信する「ソメイヨシノ・プロジェクト」の地元、区立駒込小学校も9月に創立100周年を迎えます。駒小校庭の「コマザクラ」は同校のシンボルとして児童・OB・地域の方々に愛されています。年輪を重ねた「コマザクラ」が、今は春の訪れを待っています。次号の発行時には満開の桜を混えていることでしょう。

居場所。ほっと安心できる居場所。前に進んでいくための基地となる居場所。子どもたちに、家や学校だけでなく、いろんな居場所を保障することが、私たち大人の大事な役割です。私は、豊島区の子どもの権利擁護委員として、中高生センター「ジャンプ」を毎月定期訪問しています。そこで思い思いに過ごす子どもたちと一緒に雑談したり、時に深刻な法律トラブルに対応したりする中で、居場所があることの大切さを強く実感しています。

小さな建物の中に、大きな世界が広がっている図書館。そんな図書館も、とても素敵な居場所の一つなんだよというメッセージを、私たち大人から子どもたちへ、ぜひ伝えていきたいと思っています。

古い本、新しい話 10

作家の心を打つ旅の本とは

尾崎 真理子

昨秋、金沢市で行われたシンポジウム「旅する人の旅の本」に進行役として参加した。

出席者は池澤夏樹、辻原登、湯川豊氏。主催者の「白山麓村塾」は、地元で30年近くさまざまな文化講座を運営してきた公益財団法人だ。1年前、同じ面々で作家・吉田健一を語り合った。今回は「旅」をテーマに推薦本を三作挙げてもらうところから、話を広げた。

海へ島へ、冒険旅行を繰り返してきた池澤氏は、梨木香歩『渡りの足跡』、A・シャクルトン『エンテューランス号漂流記』、松尾芭蕉『おくのほそ道』(松浦寿輝選訳)。

中国山間の村々まで知る辻原氏は、ステイブンスン『旅は驢馬をつれて』、F・キングドン・ウォード『ツアンポー峡谷の謎』、レイ・ストロース『月の裏側』。

溪流釣りの名手でもある湯川氏は、宮本常一『忘れられた日本人』、金子光晴『マレー蘭印紀行』、星野道夫『イニユニック』。これらの本の多くは文庫で手に入る。

当日、一番話が盛り上がったのは、『ツアンポー峡谷の謎』(岩波文庫)だった。1924年からヒマラヤ山脈を流れるツアンポー川の峡谷部を、イギリスの植物探検隊が一年にわたって歩いた旅の記録である。博物学、収集熱に取り付かれた当時の大英帝国は、新種の動植物に命を懸ける強者たちを世界へ送り出していた。その一人だったキングドン・ウォードの主戦場は東西2500キロに及びヒマラヤ山脈。約20回も周辺各地を訪れ、苛酷な生活に耐えつづ、氏は秘境に咲く花の美しさ、未知の風土を何冊かの書物に残して74歳で亡くなるまで、ひたすら旅を繰り返した。その気概が三氏の胸を打ったのだろう。

ツアンポー峡谷の最深部は6009メートルに及びという測量結果を中国が発表したのは1999年。金子英雄氏の邦訳が出版されたのは1999年。その文章に触発され、辻原氏が長編『闇の奥』を完成したのは2010年。壮大な探検と作品の連鎖に、会場からため息がもれた。

この日に出た「最高の旅とは」の結論は、「帰りたいくなる旅」「そこに住みたいくなる旅」「物語が生まれる旅」。ここに私の理想を加えるなら「再訪を誓う旅」だろうか。

1978年高知県南国市生まれ、20003年弁護士登録。東京弁護士会子どもの権利委員会、東京都児童相談所協力弁護士、東京都児童福祉審議会委員、豊島区子どもの権利擁護委員等。ブログ「つなぐってんたのん」(http://www.mlaw.tnt-nifty.com)を毎月更新中。

生涯の一冊

(42)



(本区には所蔵がありません)

■『ずりりんのぶちんばちん』
中村陽子/作
アリス館 100905年
ISBN 4-7520-0034-2

東京農業大学
おおほやし
大林 結花

1994年生まれ。中央図書館で司書課程の図書館実習を履修。



『ずりりんのぶちんばちん』

私は幼い頃、両親にたくさん本の読み聞かせをしてもらいました。その中でも特に気に入っていたのが、『ずりりんのぶちんばちん』です。おひさまむらでゆうびんやさんをしているずりりんが、みどりのたねをひろうことから始まるお話です。ずりりんやおひさまむらの仲間たちがやさしいイラストで描かれており、幼い私は何度読んでも、にこにこ笑いながら楽しんでたということです。今振り返ると、子どもの頃に読んだ本というのは、いつまでも心に残るものだと感じます。大人になってから読んだ本より、一冊一冊に思い出が詰まっています。

話まわっていて、思い出だけでもとっても幸せな気持ちになります。そんな記憶があるからこそ、たくさんのおもしろい本に出会える図書館は私にとって特別な場所です。

図書館司書の資格を取ろうと考えたのも、図書館は楽しい思い出ばかりだということも理由の一つでした。いつも利用している図書館の裏側はどうな感じなのだろう？本に囲まれて働くなんていいなあ。といった極めて単純な気持ちで講義を受講し始めましたが、利用者との立場では知りえないことがこんなにもあるなんて、と驚きました。

図書館実習を行った時にも、職員の方が様々なお仕事をなさっているのを間近で拝見して、こ

した努力のおかげで、利用者が不自由なく資料を利用できるのだなと再認識しました。

この『生涯の一冊』のコーナーを書くにあたって、両親と幼い頃の読書について話しました。絵本の内容をすっかり覚えてしまっていて、母より先に口に出して読んでしまつこともあったのだが、この絵本のこの文章でいつも笑っていたのだが、この本は何度も借りて読んでいたのだが、語りつくせないほどのエピソードが溢れてきました。本を通して家族と思い出話をするのも楽しいものだと思います。今の子どもたちにも、私にとつての『ずりりん』のように、たくさんのおもしろい本と出会って、本の良い思い出を作してほしいと感じています。

伊藤榮洪先生と豊島区立図書館

豊島区参与であり豊島区図書館専門研究員だった伊藤榮洪^{ひでひろ}氏が昨年10月17日に84歳でご逝去されました。多くの教え子から慕われ、講座受講者のファンも多かった“先生”の功績と思い出を豊島区図書館専門研究員から語っていただきました。



▼昭和7年池袋生まれ、早稲田大学文学部卒業。昭和30年9月から区立中学校教諭として区立雑司ヶ谷中学校を振出し、真和中学校、大塚中学校、昭和55年からは都立高島高校、向丘高校、私立巣鴨高校教諭に奉職。私立大学講師を経て、平成20年まで私立高校教諭。平成18年、豊島区図書館専門研究員に就任。平成25年10月豊島区功労者表彰。平成28年2月より豊島区参与(非常勤)。

▼豊島区文化行政の各委員を歴任する傍ら豊島新聞社顧問として連載執筆を務める。著書・共著に『豊島区史跡散歩』『豊島区風土記』『東京都風土記』『愛とロマンの世界』『だれか鼠小僧を知ってるか』など多数。豊島区史編纂委員としても尽力した。区発行の『豊島の民話』『ぶらり雑司ヶ谷 文学散歩』『ぶらり中山道集鴨-歴史・文学散歩』の執筆者でもある。

▼中央図書館では、現代文学読書会ならびに古典文学読書会の講師を昭和48年から今年9月まで務めた。また、連続講座「地域研究ゼミナール」では、豊島区の文学史・地域史の知識を発揮して講師を務めた。

*伊藤先生の名は正しくは「ひでひろ」と読みますが、「難読漢字は音読みでいい」と、「エイコウ先生」と呼ばれるのを喜んで筆名として使っていました。



左から『豊島の民話』『ぶらり中山道集鴨-歴史・文学散歩』『ぶらり雑司ヶ谷 文学散歩』

貴重な“豊島学”を拓いた先達

水谷千尋

この10年来、伊藤先生より中央図書館企画調整連絡会議等で多大な恩恵を受けました。

先生は、豊島区の歴史、地理、人物、風俗習慣等深い知見全てを巨大な抽斗に整理し総合化、豊島学と呼ぶべき、先駆的地域学ジャンルを樹立しました。それは日に日に増殖し深化していきます。

一旦話題開けば、連獅子の如き、美しき白髪なびき、バリトン声調に情熱入り、明解達意、聴く者を歴史ロマンの渦中にひき入れ、夢中にさせます。豊島の話が、近代日本の歴史社会の流れの中でいかに重要な意味をもつのか、主人公はどのような気持ちで活動したのか、ダイナミックな人間の、文化的ストーリーが立ちのぼるからです。

当館地域研究ゼミナール「豊島区の群像、雑司ヶ谷墓地、染井墓地の人々」、対談「道」「桜」「学校」など各テーマ数回に及び、熱弁講義は、満員の聴講者を魅了し現地に誘いました。

その内容は、のち『ぶらり雑司ヶ谷 文学散歩』『ぶらり中山道集鴨-歴史・文学散歩』(豊島区発行)2著書に結実しました。そこには、郷土史家的文章の細説ではなく、登場人物の人生へ、熱い共感力が盛り上がり、早稲田文学の父祖、坪内逍遙の文学精神と早稲田文人の心意気が満ちています。

豊島区が文化芸術創造都市部門表彰を受賞した直後、2009年1月開催「明治女学校100年」記念展と同年11月開催、講演会「明治女学校を語る——明治の青春がここにあった」と企画立案し主導、鮮やかに成功させました。

明治女学校は、明治文明開化早々に西巣鴨にあった女学校、日本女子大、津田塾大の魁となる近代女性養成の「教養大学」。厳本善治校長、島崎藤村、津田梅子たちが教え、自由学園羽仁もと子、新宿中村屋相馬黒光、作家野上弥生子たちが果立しました。

先生は、信州安曇野緑山美術館より当校に由縁深い萩原守衛彫刻作品「デスベア」等を借り寄せ陳列、島崎藤村令孫はじめ関係者を探し出し、是非にと貴重な思い出講演を実現しました。その実行力は教育者として当校への憧憬発露であり、多くの区内外ボランティアがそれを支えました。

余人をもって代え難い豊島区への愛と不断の知的蓄積…先生の知識と情熱をば、その一班を受け継いでいかなくてはなりません。

最後までみんなの先生

近藤大博

昭和30(1955)年、伊藤榮洪先生は、今はなき豊島区立雑司ヶ谷中学校に国語の教師として着任、翌31年、兄たちの担任となった。新聞部、文芸部、さらには演劇部を担当し、文字通り熱血指導だった。早速、ついたあだ名は「スッポン」。授業のさい、掌で顎をしごくさまが、まさしく「スッポン、スッポン」だったからだという。いや、「星の王子様」と自称したのに対し、「月とスッポン」と生徒たちが思ったからだったとの説もある。

修学旅行のさい、消灯時間後の深夜に、生徒を誘い、ともに風呂を楽しみ、先輩教員に生徒とともども叱られるなど、生徒のガキ大将であるかのような様子。中学生は多感である。ときに親と衝突する。兄もその一人だった。家を飛び出すと、向かう先は先生宅だった。

兄たちを最初の卒業生として送り出したあと、三年下下の私たちの担任となった。

親しみを感じていたので、ついつい、「スッポン」と呼びかけてしまうことすらあった。級友を「白豚」とイジメたなど呼びつけられ、「ホワイトビッグ」としか言わなかった。と抗弁したところ、それを「脆弁を弄す」というのだ、と諭された。また、「泣いて馬鹿を斬る」と、その意味の説明つきの叱責だった。それほど重大事だったのか…、心底、悔やむことになり、涙が溢れ出た。教室では、先生は、啄木を、晶子を、声高らかに吟唱、朗詠。生徒たちは、もちろん私も、その詩に、その句に、酔わされ、涙ぐむことすらあった。

先生は、数多くの教え子の仲人をし、教え子の子供たちの進路相談まで行なった。さらに中学卒業後60年の教え子たちの「文学散歩」の教師を熱心につとめた。兄の同級生で幹事役の大久保哲朗氏によると、平成16(2004)年からだけでも2か月に一回以上のペース、昨年までで76回の多きを数えている。訃報が届くこととなる2日前の10月15日にも、「先生の文学のお話を聞く会」が企画されていた。最後までみんなの先生だった。

※近藤大博氏を伊藤榮洪先生の後任として、1月1日付けで豊島区図書館専門研究員に委嘱しました。

豊島区と ミステリー

全4回

第三回

国会図書館にもない 探偵雑誌を所蔵する ミステリー専門図書館

一九九九年四月、豊島区要町の光文社ビル一階にミステリー文学資料館が誕生した。これはカッパノヘルズなどで松本清張、森村誠一、西村京太郎、赤川次郎などの人気作家を輩出させた光文社のシエラザード文化財団(その後光文化財団と改称)が創立した日本初のミステリーの専門図書館である。

戦後、松本清張の『点と線』、『眼の壁』など社会性豊かな作品が多くの人々の共感を呼び、ミステリーは主要な小説ジャンルとして完全に市民権を得たが、戦前の探偵小説は熱烈な愛好者がいたにもかかわらず、その評価は必ずしも高くなかった。また、探偵小説は英米を源流とする小説であるため、太平洋戦争中は、敵性文学として禁書扱いされていた。

このため、戦前の探偵雑誌や探偵小説の単行本は公共図書館では保存されることが少なく、資料があっても古書値が高く、当時の探偵小説は読みたくても読めないような状態になっていた。

ミステリー文学資料館は、こういう状況を解消するために誕生した図書館である。実はこの図書館は、フランスのパリ市が一九九五年十月に開設したBIBLIOTHÈQUE des littératures

des littératures

policièresで直訳するとミステリー文学図書館である。日本の資料館の名称もこういう点を意識しているわけである。



ミステリー文学資料館(外観)

初代館長は、日本のミステリー研究で大きな業績を残した中島河太郎氏。氏は同時に戦前の探偵雑誌、単行本の優れたコレクションもあつた。発定当初の資料館は、館長の収集した雑誌を含め三万冊の資料を寄託してもらい、これに日本推理作家協会から寄贈された六千冊、独自に収集した資料などを合わせて四万五千冊の蔵書でスタートした。

この資料館の最大の特徴は、開架式の書棚に置かれた資料を入館者が直接手に取って読むことができる点で、国会図書館などにもそろっていない戦前の『ぶろふいる』、『探偵文学』等々、珍しい戦前、戦争直後の探偵雑誌の現物に触れられる。もちろん、江戸川乱歩、横溝正史、木々高太郎、小栗虫太郎、夢野久作など戦前の多くの作家が活躍の舞台にした雑誌『新青年』や、戦後多くの作家が登場した推理小説専門誌『寶石』もある。

そのほか、戦前戦後の探偵小説・推理小説の評論・研究書、歴史、書誌などの棚や、個人全集やアンソロジーの棚もある。開館してから、すでに十七年。資料館の存在もミステリー界によく知られるようになったこともあり、貴重な資料が寄贈されようになったが、並行して進めて来た自主収集により、資料の充実も図られたことが

ら、寄託を受けていた中島コレクションのすべてを遺族に返却、現在はすべて資料館独自の資料で運営している。

直接資料を手にとれるのは利用者には便利だが、どうしても資料が摩耗する。このため、資料館では、戦前の『新青年』や戦後の『宝石』などは、別に完全なものをセットで書庫に所蔵している。

また、戦前の探偵小説の単行本は一冊あたりの古書値が非常に高く、また入手が困難なため、資料館でも雑誌の『新青年』の完全保存版と戦前の単行本などは特別コレクションとして書庫に所蔵し、財団の資料館運営委員会がその必要性を認めた者だけが利用できることになっている。

これら自慢の特別コレクションには、日本初の探偵小説といわれる黒岩涙香の『無惨』(明治二十三年、上田屋)や乱歩の『心理試験』(大正十四年、春陽堂)、小栗虫太郎の『黒死館殺人事件』(昭和十年、新潮社)などのほか、怪獣コジラの生みの親である香山滋の小説やシナリオ、書簡などを網羅した竹内博コレクションなどがある。



ミステリー文学資料館の館内

館内には展示室もあり、さまざまなテーマで展示もしている。ミステリーの愛好者、研究者には一度は訪れて頂きたい場所である。

権田萬治(ごんだまんじ)

文芸評論家。元専修大学文学部教授、前ミステリー文学資料館館長。推理作家協会賞を受賞した『日本探偵作家論』ほか著書多数。近著に『謎と恐怖の楽園で』(ミステリー批評35年)がある。

写真提供：ミステリー文学資料館



図書館と私 30

日原未知子・知佳

2015年度の第19回「図書館を使った調べる学習コンクール」の子どもと大人の部に「池袋には牛がいた〜この町にあった牧場〜」で優秀賞 図書館振興財団賞を受賞した親子さん



「池袋には牛がいた」
画像提供：
公益財団法人図書館振興財団

「図書館」と「調べる学習」で育つ子ども達

前年に引き続き、「図書館を使った調べる学習コンクール」に子どもと大人の部でも参加してみようと娘の知佳と決め、27年度も調べ始めました。まず、何を調べるか。娘の「池袋も好きだし歴史も好きだから池袋の歴史について調べたい!」との希望が、あまりにも漠然としていて困惑しました。そこで豊島区立中央図書館の「調べもの相談コーナー」(注)へ相談に。司書さんには今回、テーマの内容を絞る相談に乗っていただきました。そこで、見つけていただいた資料内の現代地図に、昭和時代まで存在していた牧場の場所に牛のマークがあるのを発見!今は店が立ち並び、住宅がひしめく池袋にもそのマークがありました。その事実がわたしたち親子にとって、とても衝撃的でこれしかないと思い調べ始めました。テーマは「池袋にはいつまで牛がいたか」。主に中央図書館と池袋図書館を利用し調べていく中で、豊島区の牧場の多さや、時々遊びに行く「池袋の森」も牧場であったことなど、次々に驚く結果が出てきました。牧場衰退の原因も知り、その原因について郷土史家の方にお話を聞いたり実地調査に出かけたりもしました。

1ヶ月の研究では、何年まで池袋に牛がいたかは確認できませんでした。ですが様々な発見や経験を親子でたくさん共有できた作品が完成したことに二人で満足しました。我が家は本を借りることが多いので、図書館の司書さんや受付の方々にお世話になることも多々あります。皆さんに見守られ娘たちも失敗しながらもマナーを覚え、学習的側面だけでなく生活面でもたくさん教えて頂いています。娘たちにとって家庭・学校に次ぐ「成長の場」として図書館があると感じています。ここで育つ娘たちは、将来どんな大人になるのか、とても楽しみです。(未知子・母)

「調べる学習」で調べていることが見つかったときや、新しく発見したときはうれしくてはね上がりたくなっちゃいます。本を探るときも宝探しみたいで楽しいです。「調べる学習」をすると自分が作家さんと研究者になった気分になれるよ!(知佳・板橋第5小学校3年)

(注)レファレンスカウンター

図書館イベント情報

★…児童・あかちゃん向け ●…大人向け

毎週、本の読み聞かせなどのイベントを行っています。遊びに来てくださいね。

- 各図書館の連絡先
- 中央図書館 3983-7861
 - 池袋図書館 3985-7981
 - 駒込図書館 3940-5751
 - 目白図書館 3950-7121
 - 巣鴨図書館 3910-3608
 - 千早図書館 3955-8361
 - 上池袋図書館 3940-1779
 - 雑司が谷図書貸出コーナー 3590-1335

主催/会場	おはなし会開催日		スペシャルイベント		
	幼児・小学生	あかちゃん	1月	2月	3月
中央図書館 児童コーナー (※印は会議室)	日曜日 午後2時 (1/1はお休み)	最終日曜日 午前11時	★8日・かるた大会 午後2時※ ★21日・豊島岡女子学園中等高等学校による読み聞かせボランティアおはなし会 午後2時 ★29日・ボランティアによるおはなし会(巣鴨親子読書会) 午後2時	★5日・おはなしこうさく会 午後2時	★5日・おはなしこうさく会 午後2時 ★18日・豊島岡女子学園中等高等学校による読み聞かせボランティアおはなし会 午後2時
駒込図書館 (地域文化創造館)	土曜日 午後3時	第1水曜日 午前11時 (1月は11日)	★14日・かるた大会 午後1時30分		
巣鴨図書館 地下会議室	水曜日 午後3時30分 (1/4はお休み)	第3火曜日 午前11時	★11日・ほんのじかん カルタ大会 午後3時30分	★22日・ほんのじかん スライド 午後3時30分	★1日・ほんのじかん こうさくかい 午後3時30分 ★22日・ほんのじかん えいがかい 午後3時30分
上池袋図書館 おはなしのへや (※印は地下ホール)	水曜日 午後3時 (1/4はお休み)	最終水曜日 午前11時※	★7日・親子で楽しむ映画会 午後2時※ ★11日・カルタ大会 午後3時※ ●28日・上池袋図書館映画会 午後1時※	●12日・バリアフリー映画会 午後1時30分～4時※ 音声ガイドや字幕がついた映画を上映します	
池袋図書館 ワークルーム	土曜日 午後2時30分	第1水曜日 午前11時 (1月は11日)	★7日・たんぼぼカルタかい 午後2時30分 ★28日・たんぼぼえいがかい 午後2時30分 「わらぐつの中の神様」	★25日・たんぼぼえいがかい 午後2時30分 「くまのおいしゃさん すてきなコンサート」	★25日・たんぼぼえいがかい 午後2時30分 「ミッキーマウスとプルート」 「ピーターと狼」
目白図書館 地下区民集会室	水曜日 午後3時 (1/4はお休み)	第1水曜日 午後2時 (1月は11日)	★25日・しんしゅんかるたかい 午後3時		
千早図書館 視聴覚室	水曜日 午後3時30分 (1/4はお休み)	水曜日 午前10時30分 (1/4はお休み)	★11日・ほんどこ かるた会 午後3時30分	★15日・ほんどこ 工作会 午後3時30分	

日程・会場等が変更になることがあります。事前にお問合せください。

書評講座

～ポップで表現！私に響いたこの本～(全4回)

読書体験をはやりの「書評」という形でアウトプットしてみませんか？

受講者にひとに紹介してみたい本を一冊お持ちいただき、書評・紹介文の書き方をレクチャー、文章添削のち、ポップを作り、中央図書館で展示します！

講師 佐藤 壮広 氏 (人類学者、書評家、立教大学・大正大学非常勤講師)

日時 平成29年1月21日(土)、28日(土)、2月4日(土)、18日(土)
4回とも午後2時～4時

会場 豊島区立中央図書館5階会議室

内容 第1回 導入、書評・短評、ポップについてのレクチャー
第2回 400字の書評原稿・下書きを添削
第3回 もっと絞り込み、ポップのアイデア出し
第4回 ポップの実作

定員 先着20名(12月21日より受付)

受講料 1,000円(高校生以下500円)

保育 6ヶ月以上未就学児 先着3名(1月12日申込締切)



豊島区子どもの読書に関する講習会

「子どもと絵本」(幼児3～6歳頃)

生きた言葉の体験や家族と心を通わせる機会が減っている今、子どもの成長にとってコミュニケーションの大切さ、そこで果たす絵本と読み聞かせの大切さについてお話しできます。

講師 田中 秀治 氏(元福音館書店専務取締役)

日時 平成29年2月17日(金) 午後2時～4時

会場 あうるすぽっと会議室B

対象 子どもたちに読み聞かせボランティアをしている方、読み聞かせに興味のある方

定員 先着50名(1月11日より受付) **受講料** 無料

保育 6ヶ月以上未就学児 先着5名(1月31日申込締切)



書評講座・講習会【申込方法】

受付時間：午前10時～午後6時

氏名・住所・緊急時の連絡先(電話番号とメールアドレス)を明記の上、下記のいずれかの方法でお申込みください。

※保育を希望の方はお子さんのお名前、年齢もお願いします。

●電話：3983-7861 ●FAX：3983-9904 ●メール：A0027900@city.toshima.lg.jp

●来館申込：中央図書館5階の事務室までお越しください。

豊島区立図書館の開館日及び開館時間

館名	開館日及び時間	定期休館日	1月～3月の休館日
中央図書館	平日 午前10時～午後10時 土日祝日 午前10時～午後6時	第2月曜日 第4金曜日	1月1日～4日・9日・27日 / 2月13日・24日 3月13日・24日
駒込図書館	平日 午前9時～午後8時 土日祝日 午前9時～午後6時 ※平日は、午前8時から予約資料の返却と貸出資料の受取ができます。	第1火曜日 第4金曜日	1月1日～4日・27日 / 2月7日・24日 3月7日・24日
上池袋図書館	平日 午前9時～午後8時 土日祝日 午前9時～午後6時	第1火曜日 第4金曜日	
巣鴨図書館		第1月曜日 第4金曜日	1月1日～4日・27日 / 2月6日・24日 3月6日・24日
池袋図書館		毎週月曜日 第4金曜日	1月1日～4日・9日・16日・23日・27日・30日 2月6日・13日・20日・24日・27日 3月6日・13日・20日・24日・27日
目白図書館	平日 午前9時～午後7時 土日祝日 午前9時～午後6時		
千早図書館		毎週火曜日 第4金曜日	1月1日～4日・10日・17日・24日・27日・31日 2月7日・14日・21日・24日・28日 3月7日・14日・21日・24日・28日
雑司が谷図書貸出コーナー	平日 午前10時～午後7時 土日祝日 午前10時～午後5時	第2月曜日 最終月曜日 第4金曜日	1月1日～4日・9日・27日・30日 2月13日・24日・27日 3月13日・24日・27日

※都合により変更になる場合があります。

◎ビジネスなんでも相談◎

経営コンサルタントとして様々な経験を積んだ「中小企業診断士」が、創業・起業のご相談から経営のお悩みごとまで、無料で応じます。予約は不要です。どなたでもお気軽にご相談ください。

日時 毎週木曜日 午後6時～9時(受付30分前まで)
毎週土曜日 午前10時30分～午後4時30分(受付30分前まで)

場所 豊島区立中央図書館4階 ビジネス支援コーナー
(一社) 東京都中小企業診断士協会、NPO法人としま創業ネットワーク

問い合わせ先 豊島区立中央図書館 ☎03-3983-7861

編集後記

今年も四年です。なんとわたくし女になりました。今年の目標は、家事を完璧にこなすことと、5キロ痩せることです。応援よろしくお願ひします。(高松)